

『はるかな国の兄弟』に描かれる火の二面性

スウェーデン語専攻 後藤秋音

目次

1. はじめに
2. スウェーデンにおける火の文化
 - 2.1. 人類と火
 - 2.2. 北欧神話
3. 『はるかな国の兄弟』
 - 3.1. 作品背景
 - 3.2. あらすじ
 - 3.3. 物語をめぐる議論と先行研究
4. 作品分析
 - 4.1. 破壊の火
 - 4.1.1. 火事
 - 4.1.2. カトラの火
 - 4.2. ぬくもりの火
 - 4.3. 生命力の火
 - 4.3.1. 火を体現する人物オルヴァル
 - 4.3.2. 成長のたき火
 - 4.4. 闇を照らす火
 - 4.4.1. たいまつと角灯の光
 - 4.4.2. 夜明けの光
5. まとめ

要約

スウェーデンの児童文学作家 Astrid Lindgren(アストリッド・リンドグレン, 1907-2002)が晩年に執筆した『はるかな国の兄弟』*Bröderna Lejonhjärta* (1973)は, 2人の兄弟の死と冒険を描いた物語である。「野営のたき火とお話の時代」と表現される死後の世界「ナンギヤラ」での冒険が, 兄を慕う弟の視点で語られる。この物語に特徴的なのは, 「火」があらゆる場面で象徴的に用いられている点である。それは登場人物に幸運や安らぎをもたらすものとしても, 不安や恐怖を煽るものとしても作用している。本稿では作中に登場する様々な形態の「火」を取り上げ, それぞれどのようなイメージで用いられ, どのように作用しているのかについて分析を行い, リンドグレンが描いた火の二面性について考察する。

第1章では, 我々に身近な火の二面性とスウェーデンにおける火の文化について簡単に触れ, 研究内容を述べた。続く第2章では人類と火の歴史について掘り下げた。人類にとって恐るべき自然発生的な火は, 人類がその制御方法を学んだことにより用途が多様化した。それと同時に火の象徴的な意味も多様化していった。この章では北欧神話に登場する象徴的な火の二面性も取り上げ, 北欧神話における生と死の連続性や表裏一体性を表すうえで, 火が効果的に用いられていることを指摘した。

第3章では, 『はるかな国の兄弟』の誕生のきっかけとあらずじ, 作品をめぐる議論と先行研究を紹介した。1970年代初頭の社会情勢や文学潮流のなかでこの物語が受けた批評をいくつか取り上げた。また, 善悪の戦いや生死を描いた本作と当時の社会情勢を比較する内容の批評の例をいくつか取り上げ, この物語が人類にとっていかに普遍的な問題を取り扱っているかを示した。

第4章では作中に登場する火を性質ごとに分類し, 分析を行った。はじめに, 破壊的でありながら, 転じて幸いとなる火として冒頭の火事とカトラの火を取り上げた。どちらの火もヨナタンの死を招いた悪の火だが, 兄弟が次の世界へ移動するきっかけとなったという点では, 兄弟にとって決して恐ろしいばかりではなく, 希望となっていると考察した。次に, ぬくもりの火として暖炉の火を取り上げた。この物語において暖炉の火は単なる暖房機能や調理機能を持つものではなく, 主人公クッキーに安心を与えてくれる存在であることを示

した．続いて生命力の火として野バラ谷の自由の闘士オルヴァルを取り上げた．彼の性格は「火」や「燃える」という言葉で表現されることが多く，作中で唯一火を体現する人物と言える．また，火のような彼の性格はヨナタンと対比されており，これにより善悪の戦いにおける正義のあいまいさや，やさしさと表裏一体となったヨナタンの弱さが描かれていると考察した．生命力の火としてもう一つ，たき火を取り上げた．たき火はクッキーの成長や生きる喜びを象徴していると考えられ，ある時は穏やかに揺らめき，またある時は激しく燃え盛り，そしていつかは燃え尽きるという火の特性が，人間の生と死やそれによって織りなされる物語に重なることを指摘した．最後に，闇を照らす火について述べた．闇を照らす火として主に登場するのはたいまつと角灯である．これらの火は，見たいものを見えるようにしてくれる一方で，見られたくないものをあらわにしてしまう存在でもある．さらに，火と同じ光を放つ性質を持つもので，この物語の世界観や展開に大きく関わるものとして夜明けの光を挙げた．夜明けの光とは，暗闇からの解放を告げる「希望の光」であり，作中においてその転換をもたらしたのは兄弟の「勇気」であると考察した．そして，その光と闇を生と死に重ねると，冒頭と結末の兄弟の死は，新たな命への希望を表していると思えることを述べた．

第 5 章では，これまでの章を踏まえたうえでまとめの考察を行った．人間は死が避けられない運命であるという事実を背負って生きていかなければならない．リンドグレーンは，運命としての死を人間が抱える大きな課題として受け止め，死を受け入れてこそ得られる生の尊さを 2 人の勇敢な兄弟たちの成長を通して描いたのではないだろうか．したがって，この物語の結末は決して苦しみから逃れるための生の放棄ではなく，生の尊さを知る者だけができる，人間として生きるための勇気ある決断である．また，死によって新たな命がもたらされるといふこの物語の展開は，破壊や死によって創造や再生をもたらす火の特性に類似している．リンドグレーンが描いた火の二面性は，「生と死」や「善と悪」など一見対極にあるように思える物事の境目が実はあいまいで，延長線上に存在していたり，表裏一体であったりすることを示しており，人間がその事実を学んで運命を受け入れることで，火の暖かく明るい側面に目を向けるように，生への希望を持って生きることができると示唆的に明らかにしていると結論付けた．